

京都大山崎調査報告（一九九六年度）

中島三千男

昨年度より神奈川大学日本常民文化研究所のプロジェクトとして始まった京都大山崎調査は、本年度（一九九六年度）も二回にわたって行われた。

〔第一回〕

一九九六年九月九日から十三日に実施された第一回目の調査には、中島三千男、橘川俊忠、田上繁、津田良樹、石井日出男、川鍋定男、泉雅博、関口博巨の諸氏、そして歴史民俗資料学研究所大学院生の網野暁、鈴木江津子、小林公子、須永敬、北村肇、藤隆宏、森本仙介、堀川浩通、武藤健作の諸氏が参加した。今回の調査・作業内容は以下の通りである。

一 観音寺

① 『観音寺日譜』の写真撮影

『観音寺日譜』は全部で百五十冊ほど伝存しているが、今回は大型カメラ三台を作動させて、その約五分の一の、二十九冊を写真に収める事ができた（長尺フィルム九巻）。

② 新出文書の確認作業

今回、観音寺の特別な御配慮により、帳篋筒一棹分と小型の蓋付木箱一箱分の新出文書を閲覧させていただいた。帳篋筒は左右に抽斗が五杯ずつあるもので、各々の抽斗に

は文書がぎっしり詰まっていた。今回の調査は、「観音寺日譜』の撮影を主目的にしていたため、帳簿筭については抽斗単位での、写真撮影と簡単なスケッチを行うにとどめ、新出文書そのものには全く手を付けなかった。

一 正田種信家

①文書収納箱の番号付けと短冊入れ

最初に、文書が収納されている箱に整理番号を付した。箱数は全部で二十三箱であった。右記の作業と並行して、箱番号1から順次、文書番号のためのスリット入れ作業を進めた。今回の調査では、箱番号3まで全部スリット入れ作業を終了した。

②文書の写真撮影

右記①の作業と並行して、大型カメラ一台から三台を作動させて、文書の写真撮影を行った。その結果、正田家所蔵文書のうち、およそ十分の一に相当する文書を、長尺フィルム六本に収録する事ができた。

三 大山崎町歴史資料館

同館所蔵の円明寺村小泉家文書の写真撮影を行った。未整理文書のため、今回は比較的まとまっていた御触書類を中心に選択撮影した。長尺フィルム三本分。

【第二回】

第二回目の調査は、一九九七年三月四日から七日までの間、観音寺を中心に行った。参加者は橘川俊忠、田上繁、石井日出男、泉雅博、関口博巨の諸氏、そして歴史民俗資料学研究所大学院生の網野暁、織田寿文の両氏で、これに跡見学園女子大学学部の竹内恭子、藤井華織が加わり、以下のような調査を実施した。

一 観音寺

第一回調査(前述)で確認された新出文書の現状記録調査のため観音寺を訪問。そのときの調査で確認した文書群は、左右五杯ずつ合計十杯の抽斗をもつ帳簿筭一棹文(A)と小型の蓋付木箱一箱分(B)であったが、今回、新たに小型の蓋付木箱

一箱分(C)と漆塗り紋付き状箱一箱分(D)を閲覧させていただいた。

そこで、文書群には出庫順に英記号(A-D)を与え、Aの帳簿筒の記録に着手した(帳簿筒の全体像は未記録)。まず、抽斗にA1-10の親番号を付し、親単位ごとに収納文書の保管状態を写真と二種類の「現状記録カード(スケッチ用、取り出し記録用)」で記録した(今回の記録作業は子単位レベルまで)。子単位レベルの文書群には取り出し順に子番号を付け(子番号は短冊などで明示)、原状に近い状態でもとの抽斗に再収納しておいた。

二日間の作業で、A1-7、A9-10の現状記録を完了。A8とB-Dの記録は、九七年度の夏期調査に持ち越した。

二 大山崎町歴史資料館

今後の文書調査や整理の方針、当研究所と大山崎町や地元研究者との協力関係について、大山崎町歴史資料館の福島克彦氏を交え、綿密な打ち合わせを行なった。

さて、今年度の大山崎調査の概要は、以上の通りだが、本プロジェクトにかかわる研究会や作業は、横浜の当研究所に帰っ

てからも行われている。例えば、第一回調査の後には調査報告と今後の方針検討のための研究会を二回にわたってもったほか、撮影したフィルムと焼き付けした写真との点検を、大学院生が中心となり熱心に続けている。

これまでもそうであったが、本年度の二回の調査に当たっては、観音寺の井上亮淳氏、離宮八幡宮の津田定明氏、正田家ご当主の種信氏(アイウエオ順)にはたいへんお世話になった。また、大山崎町当局、とりわけ大山崎町歴史資料館の館長西田四郎氏、福島克彦氏にもたいへんお世話になった。末尾ながら、厚く感謝申しあげる次第である。

(なかしま・みちお 日本近代思想史)